

福井県文書館県史講座記録

グリフィスの福井生活



明新館出身の南校生とグリフィス

講 師
山 下 英 一（元中部大学教授）

目 次

1	グリフィスの生涯	1
2	グリフィスの福井関係著書	4
3	手紙に見るグリフィスの福井生活	22
4	写真に見るグリフィスの福井生活	34
5	むすび	54

資料

グリフィスの福井生活

1 グリフィスの生涯

どうもはじめまして。この度、こういう機会を与えてくださった文書館の人たちに深くお礼を申し上げます。

資料は3枚ございますが、1枚目がWペーパー*¹、2枚目がEペーパー*²、3枚目がGペーパー*³と、本来ならば1、2、3でもすむところなのですが、William Elliot Griffisを記念して、こういうページにさせていただきましたので、これからWペーパーとか、Eペーパーとか、Gペーパーとか申しますので、ご了承ください。それでは、順を追ってお話いたします。

まず、Wペーパーをご覧ください。没後80年と申しますので、そんなに今と遠くはないですね。私が今、74歳でございますので、なんかそんなに遠くない。むしろ近い感じがして、長年、グリフィスについて調べてまいりました。

1843年のフィラデルフィア生まれで、修業時代というのは、ペンシルバニア市民軍（南北戦争の北軍）に従軍してしばらく戦争に参加しております。終わってから、ラトガースという大学に入りまして、卒業後、同じ町にあるニューブランズウィック神学校に入ります。これがまあ彼の少年から青年にかけての経歴です。

1870年、福井にやって来ます。これは相当な決心が要りました。最初の決心と書いてありますけど、相当な決心が要ったので、それについてはあとで述べます。

* 1 資料1 (p55)

* 2 資料2 (p56)

* 3 資料3 (p57)

それから福井の明新館*¹の教師になりまして、11か月いて、東京の南校*²の教師として福井を離れます。74年に帰国いたします。これは教師時代と申してもいいかと思います。

それから、帰国するとすぐユニオン神学校（ニューヨーク）に入り直します。それから卒業すると、牧師という職業につきます。牧師は、母が生まれ落とすとすぐにこの子は牧師にしたいというふうに一生の念願でありました。母のことは従って牧師になります。牧師は、オランダ改革派教会（N.Y.スケネクタディ）というのが上にありますね。そこが最初の赴任地です。

それからボストンに行きまして、イサカというところの牧師をして、1903年、グリフィスの還暦の年ですけど、牧師を辞めてしまいます。これが私、最後の決心というふうなことを書いてありますけど、よほど慎重に考えた結果のことだと思います。

それから後は、著述を専門に、亡くなるまで物書きをやっております。つまり、修業時代と教師時代と牧師時代と物書きの時代とこういうふうに分かれております。こんなにきちんと分かれるのは珍しいんで、しかもそれが30年おきぐらいになっております。ワンジェネレーションですね。

つまり43年に生まれて70何年まで、これが第1期でしょうね。それから還暦の1903年までが第2期で、それから最後の年までが第3期、こんなふうにしてこれはあとで私がわかってきたことなんで、最初は何のことか見当もつかないですけども、やっとううやって皆さんにこういう話をできるようになったわけです。

一番下の方にグリフィス・コレクションということばがありますが、これはラトガース大学の自慢のコレクションでありまし

* 1 福井藩の藩校

* 2 東京大学の前身

て、私はここを8回ばかり訪れておりますが、ここで文書をずいぶん見てきたつもりです。

Wペーパーの右の方をご覧ください。右端の方を。ここに人名が並んでおります。これをいちいち説明しておりますと大変なんです、全部グリフィスと関係のある人で、みなさんの中で何かご存知の名前があるでしょうか。

そのなかでも南条文雄^{*1}というのが上の方にありますね。それから下の方へ行きますと、芳賀矢一^{*2}というのがありますね。斎藤静という名前も見えますね。石橋重吉とか杉原丈夫という名前がありますが、こういう名前を申し上げたのは、芳賀矢一から杉原丈夫先生までが何らかの形でグリフィスの研究というのか、グリフィスに関心を持ってきた人たちなんです。

これを見ますと、実にグリフィスにとっては気の毒なことなんで、もっと早くからグリフィスについて関心を持つ福井の人たちが出るべきだったと思うんです。

そのなかで、斎藤静先生は福井大学でお習いになった方もおられると思いますが、『グリフィス博士略伝』、『グリフィス博士』というふうに立派なグリフィス紹介をなさっておりまして、私が最も敬愛する先生であります。

石橋重吉さんは、『若越新文化史』というなかに、福井県の洋学の歴史について、とっても重要な本だということで、もしご存知でない方は覚えておいていただきたいと思います。

杉原丈夫先生は民俗学、または昔話などで有名な人です。

芳賀矢一という人物をご存知の方いらっしゃいますでしょうか。有名な国文学者ですね。この人はアメリカへ旅行した時にグ

* 1 仏教学者、宗教家（1849～1927）

* 2 国文学者 1916年、イサカにグリフィスを訪ねる（1867～1927）

リフィスを直接訪ねて行って、グリフィスを大変尊敬していた人で、私はこの人も尊敬しております。

2 グリフィスの福井関係著書

次のEペーパーに移ります。

このペーパーは、何か私の自慢のように思われると困るんですが。グリフィスという人が著述をしたというんだけど、どれくらい書いたのかということをはじめにいつてしまうと、一番下の数字のところをご覧ください。計29というのは、私の知っている限り日本に関するグリフィスの著書の数であります。

それからその上の数、18あるんですけど、これがEペーパーの中に書いてある英文の彼が書いた本のタイトルであります。これが17、8冊書いてあると思うんですけど、これらの本なども中心にして私が論文をぼそぼそと書いてきたのが本になったり、論文になったりということで、ここに書き上げましたので、もし何か知りたいという方がおられましたら、これを参考にさせていただきたいと思います。

Eペーパーの一番上の方にFukuwiというローマ字が書いてありますが、これはグリフィスが福井にいた頃の福井のローマ字にはwが入っております。この方が正しいように感じますね。こういう細かいことが、グリフィスは非常に好きなので、私もこういうことにならって、こういう細かいことが好きなんです。

それで、「JournalからLettersまで」というこの題目はこういうことなんです。

私の著書の『グリフィスと福井』（福井県郷土新書5）という本があります。この本の特色は、グリフィスの日記、つまりJournalが英文と和文の両方入っていることで、私の自慢の作品

であります。ついでに申しますと、県立図書館にもうわずか30冊ばかり残っておるということです。

それから、2番目、『明治日本体験記』という本があります。これは、平凡社東洋文庫、まあ有名といえば有名なんですけれど、ここで“The Mikado’s Empire”という作品の第2部を私が訳したのを出しました。ずいぶん前になります。非常に利用度が高い本であります。ただこの中にちょっと申しますと、グリフィスの書いている文章ですけれども、事実と違う箇所、日付の違うところが随分あります。これはグリフィスが粗雑な人間であるというのじゃなくて、書くとまずい、削除してあったりしているところがあります。

たとえば劇場へ芝居を見に行っているんですね、福井にいる時に。当時、福井には芝居小屋が2つありまして、それはね、つまり、不義密通をした自分の妻、武士の妻ですけれど、見つけ次第、密通をした2人を刀で切り殺すというところがあるんで、それは許しがあるらしいですね。それを書いた“The Mikado’s Empire 第2部”ではそうなっております。

ところが、もう1つ、新聞社にその芝居のことで通信文を送っているんです。それを見ますとね、刀じゃないんです。刀で切るなんてもったいない、さびがつくといって、きこりの使う鉈^{なた}を持ってきまして、それをその場で砥石^{といし}で研いで、そして首をはねるという、そういう残酷な芝居になっているわけですね。あまりいい話じゃありませんけれど、そんなふうに変わっておりますので、そういうところをグリフィスは遠慮して、“The Mikado’s Empire”にはとてもそんなことまでは書けないというふうにして、そこでとどめたんだらうと思っています。まあ、そんなことをいってますと切りがありませんけど、そういう配慮もしてある本であります。

元に戻ります。『グリフィス先生越前豆日記』、これ豆本ですが馬鹿にならないんです。グリフィスはいつも手帳を懐に忍ばせておりまして、何でもかんでも記録しております。これが非常に役に立ったんですね、あとで本を書く場合に。その手帳を見ますと、とってもおもしろいことが書いてあるんで、これは青森の豆本で有名なところから何か書かないかといわれたので、飛びつくようにして書いた本です。おもしろい本ですが、ちょっと手に入りにくいです。

それから4番は『グリフィスと日本』という本です。これは論文誌を集めたもので、私の教授昇任の決め手になった本であります。

それから最後の5番目を見てください。『グリフィス福井書簡』、何だか自慢になって申し訳ないですけど、こういう本を去年作りました。これは片方はグリフィスの手紙60通すべて英文で入っております。もう片方はその訳を入れてありますので、これはまだ非売品ですけど、近い内に1冊にまとめて註をつけて出すつもりですので、もうしばらくお待ちください。PRだけしておきます。

ここでお話したいのはですね、そのJournal という日記から今お見せしたのは、Letterです。手紙です。その間、私の研究には28年間のブランクがあるんです。

これについてお話したいのは、実は日記を訳した後に飛びつくように手紙を訳したんですね。ところが、この訳がどうしても訳にならないんです。わからないんです。わかるところはもちろんあっても、わからないところがいっぱいあるんです。だからついに筆を投げました。それで放つとききました。

ところがですね、その間にいろんなグリフィスの本を読んだり、それから資料を調べたりしているうちに、はっとまた手紙の方に

心が行きまして、もちろん手紙は利用はしております、論文なんかに。だけど、そこで初めて訳してみようかなと思って読んでみたところが、やっとわかってきたんです。いろんなことがわかってきたんです。

ですからね、本当は手紙が書かれた年数はもっともっと昔なんですけれども、研究者としては、私のような日本人がですね、こういうものを研究する時には、あわててはいけないということをしみじみ思います。飛びつくようにして、訳せばいいんだというような訳の仕方をしたんでは本当は分からない訳なんです。ということ自信を持っていえますので、「JournalからLettersまで」という題にしました。

それから、Eペーパーの左の方をご覧ください。私の本は①から⑤までですけれども、論文が⑥から⑩まであります。これは大学とか、自分が属している学会とかの紀要なんかに出した論文であります。グリフィスのこういう本について書いたとか、そういうことを大体わかってほしいと思います。

それから最後に⑪から⑬ですね。⑪の「ザ・ヤトイ国際シンポジウム」、これに参加された方もいらっしゃると思います。随分前に福井でありました。それからその下の⑫は、国際セミナーといって、京都の新島会館でありました。非常に大きな学会でありましたので、私は「近代教育史の中のグリフィス」というテーマでお話しました。3番目はご存知かもしれません。5、6年前に福井市のニューブランズウィック市との姉妹都市20周年記念展で私は「未来を見つめて」というような講演をいたしました。

以上、①から⑬まで私がグリフィスについて何かにつけて書いてきたものでありますので、ご参考にしていただければありがたいと思います。

そこで、その次へ行きましょう。Gペーパーをご覧ください。

これ書きましたのは何の関連もありますが、この発表の準備をしておるうちに、ちょいちょいとおもしろいことが出てきましたので、それを並べたのにすぎないのであります。あまり関連はありませんけれど、もしおもしろい記事があったら読んでおいてください。

そのなかで、一番最初ですね、「Eb. Johnson の妹Ellenを知る」というのがありますが、エレンというのがグリフィスの最愛の恋人であります。ウイリー（グリフィスの愛称）はエレンの髪房と写真を生涯保持していた。これは、またあとでお話することがあるかと思いますが、それから1871年の9月20日のところに‘Boy’s Book on Japan, took definite shape’ というのがありますが、これは、日本の民話について、大体構想がまとまったという意味になると思いますね。そこにすでに彼は日本の民話についての発想が芽生えているということです。

その次の“Tales of Old Japan” というのは、イギリス人が書いた本ですけれども、グリフィスが福井にいた頃に出た本です。こういうものを姉さんに注文しておりますので、こういうところにも民話に対する関心がすでにあったということでもあります。

それから、もう少し下の方を見てください。彼はInternational Folklore Congressという世界民話学会というのに参加しまして、‘The Folklore of Japan’ という日本の民話という講演をしております。これは私が研究中发现した項目でありまして、グリフィスの福井民話の発祥は相当古いものだなあとしみじみ思いました。さすがにグリフィスのやることだなあと感心したのであります。

それから、もう少し下の方を見てください。真中から下の方です。「The Mikado’s Empire 第10版 2分冊になる」と書いてありますが、“The Mikado’s Empire” がグリフィスの代表作であ

り、日本を知る外国の人たちの貴重な本になったものであります。背文字のところにですね、『皇国』と書いてあるんです。これも元からある題名ですが、私はこれはあまり使わないことにしております。あくまでも“The Mikado’s Empire”というふうに使っております。これがですね、私が持っておりますのは初版ですが、ざっと625ページあります。

この最初に日本地図がかいてありまして、何と福井県だけは別に出ています。この本を読むと、しみじみ福井県の人間にとってはありがたいなあと思います。なぜって福井のことがいっぱい出てくるんです。こんな本をね、放っておくわけにいかないでしょ。というふうに私は思っているんです。

もとへ戻ってみましょう。「The Mikado’s Empire 第10版 2分冊になる」と書いてありますね。これが2冊に分かれるんですよ。なぜかっていうと、ページが増えていくんです。なぜ増えたかといいますと、そこに書いておきました。版を重ねるとき、新しい論文を必ず加えていくんです。だから、放っておかないですね。最初に本を書いちゃったら、もういいだろうというのではなくって、後々まで新しい歴史のページを加えていくわけですね。そうしているうちに700何ページになってしまったんで、1冊ではまかないきれない、2冊にするということで、あとは2冊本になっております。そういうことを申し上げておきましょう。

それから、一番下のところにですね、絶筆というのがあります。グリフィスには絶筆があります。これ実は、もう少し後に申し上げてもいいかなと思っているんですけど、ちょっと読んでみますね。“Japan’s Great Emperor, Mutsuhito and His Reign 1868～1912”というの、私が見た絶筆なんです。途中で切れております。原稿は途中で切れております。その後、これがグリフィスの『明治史』になったんだろうと思います。または、『明治天皇』に

なったんだろうと思います。

睦仁といういい方は、グリフィスによれば、なぜ日本人は明治天皇なんていうことばを亡くなってから使ってるんだと、あれは名前といえないのではないか、外国人は必ず睦仁というよ。そういうふうにいっています。これは正しい意見じゃないかと思います。だから、ここには睦仁というふうに書いてあります。

グリフィスが教えてアメリカへ連れて行った今立吐醉^{いまだてとすい}*1という青年がいました。今立吐醉がグリフィスに手紙を書いて、「先生、今あなたが書いておられる明治に関する本を私に是非訳をさせてください。私は、その訳から得たお金を、福井の子どもたちで、科学を勉強したいという希望の子どもたちに使いたい」というふうに先生に頼んでいるわけですね。グリフィスは、わかったと返事したんだけど、絶筆になって終わってしまったという話があるわけです。そういうことも1つ話をしておきます。

それから、最後というか、G ペーパーの右のところを見てください。これはですね、グリフィスと同時代の日本の歴史上の出来事のどなたでもご存知の背景を書いておきました。たとえば、廃藩置県^{はいふつ けいせん}だとか、それからずっといきますと帝国憲法だとか、それから日清戦争だとか、ということが書いてありますけれども、その並びのところにですね、日本精神ということばが書いてありますね。大和魂などということばもそこに入ると思います。つまり日本は軍事力が非常に強力になってきた時代であります。このへんからグリフィスは日本との関係を「和解」ということばで努力しなければいけないという気持ちになってきます。まあそれもあとでお話します。

G ペーパーの1 番右下をご覧ください。これは忘れないうちに

* 1 1865～1931

今言っておきましょう。グリフィスの最後の日記なのです。グリフィスはJournalをずっとつけておりました。85歳で亡くなるまでつけておりました。

どこで亡くなったかといいますと避寒地と申しまして、グリフィスのいたプラスキというニューヨーク州の町は寒いのです、冬は。ですからフロリダのウィンターパークという土地にしばらく滞在します。そこで心臓麻痺で急死したということなのですが、亡くなったのは確か2月5日だと思います。最後の日記は2月3日までつけてあります。その2月2日にこういう記事があったのでお知らせします。

ローリンズという大学でグリフィスは10時から学生に話をする、何の話かというと ‘On Japan’、日本についての話をするというのです。最後までこういうことをやった人であります。この中には必ず「福井」が出てくるのですよ。忘れないでください。

以上でざっとですが、WとEとGという3つの資料についてちょっとお話をしておきます。そこでですね、Eをもう1度見てください。Eペーパーですね。今から少しお話したいことがあります。

それはEペーパーの中に “The Mikado’s Empire” というところがあって、第2部はさっき申し上げたように私が訳をしましたけれど、その “The Mikado’s Empire” というのはいったい何が書いてあるのだろうかということをお話したいと思います。

それからもう1つは “Japanese Fairy World”、つまり『日本昔話』という本もどんな本であろうかということ、それからもう1つ “The Religions of Japan” という『日本の宗教』という本はいったい何だろうということ、この3つを私はグリフィスの3部作といっております。この3つが結局、最後まで彼の主張になるわけであります。しかもこの3つは、また我田引水ですけれど

福井で発生しているのです。もう少しいいますと、グリフィスは福井を通して日本を知りました。決して日本を通して福井を知ったのではないのです。それを私は確信を持っていえます。

“The Religions of Japan”という『日本の宗教』という本は、やっぱり神道、神の話が中心になっております。何といてもアーネスト・サトウ*¹というイギリスの外交官がおりまして、あの人の見聞、それから知識はものすごい人であつたらしく、その影響を受けて、それを参考にした本であるといわれておりますが、私はそこまでは勉強ができませんので、そういうことをお伝えしておきます。

でもこの中に、さっき申し上げた南条文雄という人、福井の人ではありませんけれどもグリフィスの頃に福井の僧侶学校に行った人だとは思いますが、福井のお寺さんに養子にきて、実はこの人は日本で屈指の梵語の研究家であるし、立派なお坊さんであるということをご存知の方はいっぱいおられると思います。その南条文雄が著した“A Short History of the Twelve Buddhist Sects”という日本の仏教の宗派の簡単な歴史の本があります。それをこの本は十分に利用しております。そのことを断っておりますので、私もなんとなく自慢ができる本であります。

もう1つ、グリフィスは昔話を書いております。挿絵があります。挿絵は専属の^{おおざわなんこく}大沢南谷という名前の絵描きなんですね。江戸時代の絵描きなのですが。この大沢という絵描きを専属と申しましたのはつまり彼を雇ったんですね。この中の挿絵もその大沢が書いております。独特な挿絵であります。

“The Mikado’s Empire”というのはですね、これは歴史書だと思われていたのです。思われているのです、現に。というのは、

* 1 Ernest Satow (1843～1929)

第1部が何年から何年までの日本の歴史というタイトルがついているのですね。それからなおのこと、『皇国』という名前がついておりますから、簡単に皇国史観を述べているのだと思っている人がいるのです。しかし、これは大間違いです。それを1つよく頭に入れておいてほしいのです。皇国と書いてあるから簡単に皇国史観を述べているのだと、そういう歴史観で書いてあるのだと思って、しゃあしゃあと書いている人がおりますが、おそらく読んでいないのではないかと私は思っております。私は、この本はグリフィスの歴史認識をふまえた旅行記だと思っています。

なぜかと申しますと、これを出版したハーバー・アンド・ブラザーズという会社のPRにですね、こう書いてあるのです。探検とか旅行とか冒険シリーズの1冊として出版すると。要するにこれは紀行文なのですね。だからおもしろいのです。非常におもしろいのです。だって武生も出てくるし、鯖江も出てくるし、福井は勿論のこと。1876年、明治9年ですね、これが出たのは。明治9年に我々のことをどこでも書いて、どこでも読まれているというそのようなことを考えられますか。そういうふうに私は旅行記だと思っております。

それから、グリフィスは福井に滞在中も暇さえあれば散歩をしました。暇さえあれば見聞しました。葬式があれば行列が続く。あとをついて行くのですね。そしてその墓地まで行って火葬場でどのようにして死体を焼くか、窯はいくつあって火は誰がつけるか。全部見ております。

それをどうしたかといいますと、どこへ書いたかといいますと彼は通信社と契約しているのです。数社あります。これからの細かいことはいいにくだすけれども、そのどこかへですね、その模様を一部始終書き送っているわけです。そして、題は日本の葬式と、‘Japan’s Funeral’ という題で書き送っているのです。私

はそれがあることを見つけたので、それから得た知識が今のお葬式の知識であり、グリフィスの色々な知識であります。

とにかくグリフィスは見えております。国見岳に行きます。なぜあのような所に行くのかと、あそこから石炭が出たのです。石炭はいったいどのくらいの質のいい石炭か、質の悪い石炭かということ調べに行くのです。

そして、なぜそのようなことが彼にわかるのかというと、彼はラトガース大学で地質学の専門家になったのです。化学ではないのです。ニュージャージー州の地質学という論文を書いて彼は卒業したのです。福井にやって来ると、福井の藩主に自分の論文を献上しています。自分はこういう勉強をしてきたのだと。だから、彼はすごい知識を持っているのです。

それで私が余計なことをいうとお笑いになるかもしれませんが、高校の教師をしていた時に外国人教師と一緒にになりました。この教師と私はグリフィスの白山登山と一緒にやってみようかといって、グループを作って同じ日に、グリフィスが登った同じ条件を作って山登りをしたのです。ついて来てくれたのは、Gerald LeTendreという外国人教師でした。びっくりしたのは白山へ登って一服する、そこに石ころがある。これは何石だといえるのですね。花が咲いている。名前がいえるのですよ。びっくりしましたね。僕はこれがアメリカの教養であろうと思っているのです。だから頭の中で覚えているのではなくて実際にこれとこれとが名前が出てくるわけですね。彼は辞めてスタンフォード大学の大学院を出ましてジョージア大学の教授をしております。

グリフィスもおそらく彼と同じような教養があったのだらうと思うから、福井のグリフィスの生活は全く楽しいものでした。しかしその反面、何があったかということはあとで話が出ると思います。

第28章第1部の一番最後のチャプター、章はですね、グリフィスがアメリカに帰って最初に書いた論文に‘The Recent Revolution in Japan’という1875年の論文があるのですが、それをここに入れたのです。その論文がこのなかで燦然と光^{さんぜん}っています。私が読んだ中でその入れた論文が一番立派だと思います。

しかし、雑誌に書いた最初の論文とここに入れた論文とを比べてみたことがあります。主義主張は同じです。ところが文章がかわっています。もう添削添削でほとんど姿をかえたくらいにかわっています。これはグリフィスが、文章が非常に上手いという理由だろうと思うのです。我々が文章を書くときにも何回も消したり加えたりして書きますね。グリフィスの論文はそういうふうにして書かれた論文だということを、私が実際確かめました。自分でそういうことをやってみました。こちらのことばがこうなっているのは、こちらではこうなっている。まことにすごいものでした。

この論文でなにが良かったのかといいますと、ペリーが来航しましたね。日本はペリーに負けたと、簡単にいいます。私は難しいことばをあまり知らないものですから。ペリーに負けたと、つまり外国の勢力に負けてきたと。それはわかると。しかし、それが日本をあのような日本にした最大の理由ではないと、理由は日本の中にすでにもう学問をしてる人がいっぱいいたのだと。いっぱい洋学を勉強している人がいたのだと。たとえば、左内^{*1}がそうですね。だから、彼らがやって来ても、それに応ずるだけの日本の中に力があったのだなどということを簡単にいっております。

これを彼は英語でいっておりますがね、勿論。衝動説と衝撃説があるのです。衝撃というのはインパクトなのです。(手を打つ)

*1 橋本左内 幕末の開明派志士、明道館の改革に従事（1834～59）

「パーン」と当てるわけなのです。衝動というのはインパルス。中から湧き出てくるものだということです。日本はペリーと立ち向かうことができたのはインパルスがあったからだということを、私みたいに歴史にうとい男は「なるほどなあ、こういう考え方をしてくれればわかるなあ」と思って、感心した論文でした。長い論文ですけども、いまだに忘れません。

これが2冊本になって1913年が12版、最後の版なのですね。その版についての論文が‘Japan a World Power’。この論文がどういう論文かと申しますと、日本は日清日露^{*1}の、簡単に言いますと軍事力が高まってきて世界に冠たる力を持ってきたという時代になっています。富国強兵策が実を結んでいるわけですね。そのときに書いた論文なので、もし日本に対して、危惧、心配なことがあるとすれば、それは軍事力であるということをはっきりいっております。この時代にもうすでに。軍事力がつくのはいいけれども、それがナショナル的な国、ナショナリズムになっているのだということをいっておるのですね。それがさっきちょっとね、Gペーパーで申しました大和魂とか、それから武士道というようなことばと連携してくるわけです。

だから、グリフィスが日本と触れ合った時はまだグリフィスにとっては日本は文明化されていい、封建制度が崩壊し文明化されていく、その手助けをしているのだという確信があったのですが、もうこの頃になってくると日本は変わってしまったと、日本は恐ろしいぞということになってくるのですね。それで彼は「和解」ということばを使うようになります。グリフィスが日本に対する一生はですね、決して彼が楽観視できない、楽観から悲観にかわっていくという、ちょっときつくいえばそういう間に彼

* 1 日清戦争（1894～95）、日露戦争（1904～05）

が存在していたといえると思います。

そういうことがこの本でわかるということで、もう一言いいますと、グリフィスの書くもの、または考え方には必ず最初にしたのもので通すというのではなくて、あとまでちゃんとその変化を見届けているということでもあります。

それからもう1つ、この本の中にね、日本の国民性について書いてあるのです。日本人とはこういう国民性を持っていると。その2つ、私が感心したのはですね、改善と進取ということばを使っているのです。改善というのは、日本人は間違っている、これは良くないと思ったらすぐに変えることができるのです。そういう国民性を持っているのです。

もう1つは、進取。先へ進んでいく。先へ進んでいく。新しいものがあったら、すぐそれを理解しようとする。それはわかりますね。そういうことは日本人にはありますね。そういうことを彼は福井を通して、もう感じ取っているのではないかと思います。その他色々なことがこの本には書いてありますので、そういう本だということをお知らせしておきます。

それからもう1つ、クリスチャンブシドウということをここでいっているのですよ。グリフィスはキリスト教徒なのですね。しかもフィラデルフィア生まれのキリスト教徒というのは非常に厳しいです。生活は素朴です。何といてもあそこにはクエーカー教徒*¹がおります。だから贅沢はしません。グリフィスの福井生活は非常に質素です。贅沢はいっさいありません。それについては、あとで述べます。

そのクリスチャンブシドウのブシドウというのは内村鑑三*²と

* 1 キリスト教の宗教団体の一つ

* 2 キリスト教思想家（1861～1930）

いうキリスト者が同じことをいっているのです。‘Bushido and Christianity’ ということばを彼はその頃いっているのですが。私は面白半分にどちらが先にいったのかと調べてみました。先陣争いですからね。

調べたところどちらだと思えますか。グリフィスが先にいっているのです。なぜ内村鑑三とグリフィスがそのような似たところがあるのか、それについては詳しくは申しません。いうとおそらく笑われてしまうと思いますが。

この“The Mikado’s Empire”の口絵というのがございますね。口絵というのは最初に写真がついてますね。これを口絵といいます。これは日蓮上人です。日蓮上人が今、鎌倉武士に首をはねられるところなのです。ところがそこへ光がさしてきて、武士が刀もろとも飛んでいってしまう「竜口の法難」という有名な絵がありますね。これを彼は掲げているのです。なぜ、日蓮かというと、別にグリフィスは日蓮を知っているわけではないのですけれども、もしキリスト教と日本の宗教とがぶつかるのならば、喧嘩するのは日蓮宗だろうと、こういう考え方をしているのですね。そして内村鑑三が“Japan and Japanese”という『日本および日本人』というあの5人ばかり日本の代表的な日本人をあげている1人が日蓮上人です。

次に、もう1つのこの民話のことですがね。グリフィスは民話を46編書いております。日本民話を46編。3冊、本がありましてね。私があちらこちら数が重複しているのを調べてみたところ46編あります。そのうち6編が福井に関する福井民話であります。福井民話というものがあるのです。

これは私が近年、『若越郷土研究』で発表したことがありますので、ご存知の方があるかもしれませんが。それについてちょっと述べておきます。

さっき申し上げた “Tales of Old Japan” という、これはイギリスのミットフォード*1という外交官が、書記官ですけれども、出した本なのですが、たとえば「舌切雀」というのがありますね。「舌切雀」を、あの日本語を話のとおり英語に訳してあるのです。ちょっと考えてもおわかりでしょう。あのとおりに訳してもわからないですよ、外国人は。それをグリフィスはわかるように訳したのです。

法政大学のヘリング先生という女の先生がおられますけれども、日本の昔話の専門家ですけれどもグリフィスのこの本が一番立派だ、信頼できる最初の日本の昔話の英語本であろうと、このように太鼓判を押しておられます。

ではいったい、どういうことをやったかと申しますとね、ミットフォードの「舌切雀」というのはですね。心の優しい爺さんが雀を飼っていたが、洗濯の糊をなめたので意地の悪い婆さんが雀の舌を切って放してしまう。むごい話にすごく悲しんだ爺さんは雀をさがしに出かけて、再会がかない爺さんは雀の宿でご馳走になって、帰りの土産に貰った軽いつづらは宝物で一杯で、よくばり婆さんが希望したつづらはいたずらおばけとか妖精がでてきて、爺さんは何とかかんとかありますね。この訳文の趣旨と展開は元の説話に忠実なのです。

しかし、グリフィス版はどうなっているのかといいますと、話の筋においては違いはありません。話をより論理的により面白く読ませるための創意工夫が施されているのが特色です。

どのようになっているかといいますとですね、まあ非常に理屈っぽいのですよね、グリフィスはね。爺さんが歓待された雀の宿でのことが全ページの3分の1を使って楽しく描写されているの

* 1 A. B. Mitford 英国公使館員 (1837～1916)

です。元の話では雀の宿で歓迎を受けてつづらをもらって帰ったとだけ、ところが読んでみますと、グリフィスの本は雀の宿でのことが全ページの3分の1を使っている。楽しく書いてあるということで、すずめのホームがどうなっているかと、何が部屋にはあってとかいう細かいね、それを書くとアメリカでも外国人でも読んでわかるという、なるほどなあというふうにおとぎ話的に読めるというふうな内容で彼は書いているわけです。そういうところが特色です。この特色は忘れてはいけないと思いますね。

それから、福井民話というものはどのようなものなのかと申しますとね、初めにお見せした“Japanese Fairy World”という小さい本の中に5つあるのです。ところが3冊目、ずっと後に出した本ですけれどもそこにはその5つプラスもう1つ加わっているのです。都合6つあるのですが、最後の1つ加わったのがどちらかという、ラフカディオ・ハーン*¹的な幻想的な話が入っております。ラフカディオ・ハーンの真似をしたのかと、真似ではないですけどイメージを少し取ってきたような感じはいたしました。しかしその前の5つは彼の本来の作品でありまして、しかもその作品は後の作品とやっぱり違うところがあるのですね。

その中に1つ、バツタの行列というのがあります。例のバツタですね、昆虫の。あのバツタがみな侍になっていて、参勤交代の行列を組んで行くわけですよ。その藩主が乗った駕籠^{かご}が真中にありまして、その行列が行くのです。バツタは何をする、コオロギは何をする、みんな昆虫が出てきて役目があるわけですね。そしてその行列が行ったあとに何を意味するかという、グリフィスがいる時には、廃藩置県という世の中の変化が一杯ありまして、それでお城の中のものはその交代の時に使った駕籠でも全部売り

* 1 小泉八雲 日本研究家、作家（1850～1904）

物に出されたいですね。ほとんど投げ捨てられたいですよ。

お堀を埋めて、お堀を埋めたのはなぜ埋めたかという壁がありますね、土壁が。それを落としてお堀をすぐに埋めて、そしてそこに家を建てていったという、もう全くあつという間の出来事であつたらしいですね、廃藩置県の時のお城の崩壊というものは。そういうことは暗に示している物語になっております。

そこで、初めにはそういうことだけで終わったのが、あとの本ではどうなっているかといいますと、その駕籠を見送りながら街の虫たちはみんな額を土につけて土下座をしております。そしてそこに小さな女の子がおります。通り過ぎた後に母親に聞きます。「何か駕籠の中のものが見えた?」「見えるはずがないじゃない」これを入れてあるのです。これは何を意味するかは、おそらくおわかりになろうと思います。

そういうふうにグリフィスの書くものは、先も申し上げたように、必ず振り返って足したり削ったりして文章を作っておるということを、この場で話をしたいと思います。

ハーンとグリフィスというのを比べてみても面白いと思います。私はハーンのことについても興味をもっております。ところがですね、『怪談』というハーンのあの代表作、あれもFairy Talesであります。妖精物語と考えてよろしいです。ユーモアやアイロニーに乏しいということがいえると思います。幻想的ではありませんけれども、ユーモアやアイロニーに乏しいということ。

ところがグリフィスのほうは、このユーモアがあり、先の行列の後の親子のようなアイロニーがあるというところが違うと思うんです。私はハーンの『怪談』があれだけ人気が出て皆に読まれていると同時にですね、グリフィスの物語も読まれていいんじゃないかと思う。それが両方読まれて、1つの日本の民話に、昔話

になるんじゃないかということをこの本で思いました。そういうふうにお話をしておきたいと思います。

以上、私の話の前半はこのぐらいで終わりたいと思います。

3 手紙に見るグリフィスの福井生活

それじゃ後半にはいります。後半は今日の本題の福井生活についていくらか述べた後、写真を通して福井生活のことについて触れたいと思います。2点あります。

グリフィスのその手紙というのは、英文手紙は60通あるということを私が確認しました。ラトガース大学へも知らせております。といいますのはですね、ちぎれていたり、どこからどこへと続いているかわからなかったりということがあるんです。

なぜかと申しますと、飛脚が手紙を集めに来るのが月に1回しかないんです。とても今の郵便制度と一緒にしちゃいけませんよ。だから例えば60通をですね、彼が滞在した11か月で割ってご覧なさい。5通ぐらいずつ毎月出しているわけですよ。

そうしますとね、例えば今日書くでしょ。まだ飛脚が来るのがわからないと。それも不定期的ですから。そうすると、その次また書くでしょ。と、何日に来るってわかるでしょ。急いで書くでしょ。明後日になったよ、と。また書くでしょ。

そういうふうを書くとな、手紙のいちばんはじめ、Dearって書きますね。これは姉さんに宛てた手紙ばかりですから、ほとんど。Dearマギー、姉さんのことマギーとっております。愛称でね。Dearマギーと書くんですよ。ところがまだ取りに来ない場合は、Dearマギーを省略しますね。そしてもう1つ最後に自分の名前を書きますね。私なら山下英一と書きます。グリフィスはウイリーという愛称で書きます。

ところがウイリーがないんですよ。その次の手紙の最後にウイリーと書くと、ああこれだけのものがまとまっているのかとわかる。とにかく何日かかかって書いた手紙って、1通か2通の手紙が4通にも5通にも分かれて見える。どこがどうなっているかわからないということが、現実問題だったんです。もちろん、日付だけは必ず記入してある。

それもあってですね、訳ができなかったんです。これをね、なんというか、日夜ああじゃないかこうじゃないかと。しかも日にちがわからない時には、三井寺と永平寺とを間違えました。

だって「立派なお寺に見学に来ている外国人で、最初が私だ」なんて書いてあるんですよ。てっきり永平寺だと思いましてね。どうも合わないんですよ。そしたら彼は、福井に来る前に三井寺へ行っている。琵琶湖を渡ってやって来ているわけですね。そういうことが今思うとなんでもないことだけれども、実際に自分がそれをやっていると、そうわからないんです。そういうことも確かめて、60通ということに決めて、ようやく訳を始めたということをおきます。

それから福井からフィラデルフィアの実家まで、手紙は何日かかると思いますか。2か月かかるんですよ。2か月。そうするとね、ある用件を書いて2か月先に着く。すぐ返事をよこして2か月。4か月ですよ。だから用件は書けないの。用件は無効になっちゃうんですよ。そういう手紙の状態だということを知らないと、福井のグリフィスはわからないですよ。

彼は筆まめな人ですからね、私が調べたかぎり福井滞在中に220通ぐらい手紙を書いております。それはまめな人なんです。その中には先に申し上げた新聞などへの通信もあります。色々な要素がありますけれども、とにかく筆まめに書く人です。筆まめにメモをする人です。筆まめに文章をなوس人です。

福井には、明治5年1月の20日過ぎまでおりましたけれども、1月17日に、実はお母さんが亡くなっているんです。これは届きません。東京へ行ってから届きます。じゃあなぜ書いたかという、グリフィスはそれを思って、自分のいなくなった月まで戻って、そこに母の死と書き入れました。そういうことも福井、だからですね、もっといいたいことは福井へ来るということ自体がすごい決心なんです。命にかかわる決心だということを、今日の簡単に留学する、簡単に行って帰れるという時代とは違う、当然の違いなんです。別にそっちが良い・悪いというのではないです。しかし、知らないと困ります。楽に行って帰れるという時代じゃないということを知らないと困る。母の死もそういうことで終わりました。

ところが、彼は母からいただいた丈夫な体、本当に丈夫でした。85歳まで生きたあの当時の人ですから。それから良心、心の美しさ、そういったものを母から受け取ったことを、後に彼ははっきり書いております。お母さんからいただいたものだとお母さんに感謝しております。その母さんが入院したり、亡くなくてももちろんお葬式をしたときは、その費用についてはグリフィスが全部支払っております。じゃあどうして家の人やらないのかというと、家の人には収入がない。この家族のことについてはあとで写真をみせます。その時にお知らせします。

お母さんの名前はアンナ・マリア・グリフィス、アンナ・マリアといいます。モーツアルトのお母さんと一緒です。一緒の名前ですね。ちょっと面白いなあと思って。非常に熱心なキリスト教徒で、フィラデルフィアの大都会でも知られていた婦人だったそうです。死の床でお母さんが一番気になる次男のグリフィスに遺言を、ことばを遺しました。

それがね、当時の新聞の死亡記事のところに載っているんです

よ。死の間際のことばがね。それを訳しますとね「息子に伝えて欲しい。地上では2度と会えなくなっても母は天国で待っているから」こういうことばだけなんですけれどもね、こういうことばを残して亡くなっているということが新聞に出ています。先も申し上げたように、愛とか、健康な体とか、美しい心に感謝しているということを最後まで彼は書いておりました。

それで、ちょっと変わったことを申し上げます。グリフィスの月給は300ドルです。300円と考えると結構です。ところがですね、彼は実家の生活費も出しているんです。それから、借金を払っているんです。なんだ借金で。お金がたくさん入っているのに、これはわからないんです。私もよくわからなかったのだけれども、日本に来るまでに借金があるんです。

福井藩から渡航費に400ドルもらっているらしいです。船のお金とか、汽車のお金とか。ところがそんなものでは間に合わないらしいですね、当時外国へ行くということは。しかもそこで生活するということは。だって書籍も持って来るんですよ。それでね、すごい借金をしているんです。どこから借金をしたか。一番大きいのは教育局です。福井でいえば福井の教育委員会にあたります。そこから借金をしているんです。

まず借金を支払わなければならないというのが、彼の日常生活の苦しいところなんです。だから自分の勝手に使えるお金はほとんど無かった福井生活です。これ、苦しいですよ。実に苦しい。それ程お金が彼にとっては大事な、貴重な、そして尊敬すべきものだったんですよ。

ところがですね、ちょっとこれ余談になりますが、グリフィスは福井にいるときに化学の本をつくらうとしたんですよ。それをつくって印刷して生徒に分けると、その方が能率が上がると考えたのです。

1つにはね。彼は英語で化学の本を書いて、それを訳す人が欲しかった。藩はそれを探してくれたのです。探してくれて、とてもいい通訳をしてくれる男だなあとグリフィスは感心したのですが、ところが実際にやってみると全然間に合わない男だということがわかったんです。

私が最初にグリフィスの日記を訳しましたね。その時に1つだけわからない文字があったんです。それがOtaという文字、またはOhataという文字なんです。ローマ字で書いてある。Mr.Ota、ずーっと後になってくるとMr.Ohataとなっているんですね。で、私は探してもね、検討がつかないから、『グリフィスと福井』のあの中の日記のところに、1つだけ片仮名でオタまたはオハタと書いてあるところが、何箇所も出てきます。あれはね、あの本が出てから私の恥ずかしい一面だったのです。誰かわかる人がいるんじゃないか、いや私しかわからないのか。

ところが今度わかったのです。まあ、こういうふうに書いてあります。不明の人物が12月3日の手紙で正体をあらわした。私、手紙を読んでやっとわかったのです。名前は太田源三郎、今太田さんの悪口をいっているようで非常に申し訳ないのだけれども、さっきの名前が書いてあったWペーパーを見てください。そこに確か太田源三郎ってありますね。その太田源三郎という人だということがわかりました。

これがどういう人物かという、高い月給をもらっているんですよ、この太田さんは。グリフィスとあまり変わらない月給をもらっているんです。だから仕事ができないのにそんな高い、自分に近いような月給をもらっているということで、グリフィスは非常に不快になったんですね。グリフィスの手紙の中で不快なところはそこだけです。他は1か所ありません。そこだけは本当に不快な気持ちを味わっているんですね。

彼は何ができたかという昔話ぐらいが訳できる程度だったと。じゃあなぜそういうふう^にに偉い人だといわれたかというのと、片言というよりも、しゃべれたんですね。だから話は通じるんですが、物が読めないと。そこでグリフィスは書いてあるんですね。literature、文学とはいわないです、書き物のことです、当時は。書き物が読めないので駄目だ、間に合わないですよといふように、おさえておりますね。で、その人物がどういう人物かということですが、こんなふうに私は調べました。

Mr.Ohataは静岡藩士、太田源三郎。1835年から1895年。これは生まれて死ぬまでの年です。1862年から63年にヨーロッパ使節の通詞^{つうじ}、通訳をしておりました。横浜語学所の英学教授と、こういう経歴の持主^{かしと}なんですね。立派なものです。

そして、静岡藩の貸人^{かしと}といって、教育指導者として他の藩に派遣されるという、そういう制度がありました。その静岡藩の御貸人として福井藩に雇われたと。こういう人物なのです。

なぜ雇われたかといいますと、横浜語学所が閉鎖してしまっ^てて行き場を無くしてしまう、浪人したんですね。それで勝海舟の世話で、福井藩にこの男を斡旋したのであると。その取引をしたのは福井藩の学校係の人であります。この学校係の人は立派な人なので、またあとでお話いたしますが、こういう人物が雇われたということです。

福井藩にしては非常に恥ずかしい雇い方ですのでね、だから時代の異常な移り変わりのところではいいこと・悪いことが混ざり合っているわけなので、これには私も参りまして、みなさん、もしお持ちならば『グリフィスと福井』の中のその名前は本名の太田源三郎とお書き換えください。それをひとつお話をしておきます。次にまいります。

グリフィスが福井に行かないかという話を受けたのは、ニュー

ブランズウィック神学校の学生の頃でした。それに応じて神学校のグリフィスの先生たちが会議を開きました。学生のグリフィスを日本の福井というところに遣りたいのだけれども、福井は知っている、ご存知のように日下部太郎*¹がいました。知っている。大賛成だと。ひいては化学の勉強だけではなくて、キリスト教の宣教にもなるのではないかと神学校の教授たちは口を揃えています。

ところが1人バーグ*²という神学校の教授だけが反対をしたのです。駄目だと。反対の理由は、日本に行くと誘惑が怖いと。行くなと。もちろん彼は来ました。ところが案の定、彼は誘惑にもう少しで負ける場所でした。この誘惑というのは女性とのことであります。彼は自分の身の世話に雇った18歳の女性を思い切って解雇しました。お金をあげて、親にもよろしく言ってくれと言って解雇しました。

それは姉さんへの手紙でよくわかり、彼は姉さんに告白したわけですね。その時に初めてバーグ博士のいっていることは本当だなと。じゃあ日本だけが誘惑の国かと。そうじゃない、とグリフィスはいっています。外国、西洋文明を日本にもたらすのが自分の仕事だけれども、文明と一緒に罪惡がいっぱい入ってくると。日本もそれにやられてしまうことがあるよと。こういう考え方がグリフィスの考え方であり、我々の考え方でもなくちゃならないと思うんです。

つまり二元性ですね。片方だけをいうのではなくて、こういうふうにいったら、いやこちらにも同じようなことがいえるよという考え方が、私がグリフィスから学んだことの1つです。どこか

* 1 福井藩最初の留学生（1845～70）

* 2 Joseph F. Berg（1812～71）

らでも学べると思うけれども、こういう時代に書いている人のことこそ、時代が時代ですから深刻だろうと思って学べるのではないかと思うのです。

次の話に入ります。じゃあ福井のグリフィスは幸せだったかと。仕事はものすごくよくやりました。だって福井藩が、グリフィスのためになることだったらどんなお金も惜しまなかったのです。これがまた福井の偉いところなんですね。人物をみてこの人ならやれると思った以上は、何のお金も惜しまないのです。それが証拠には、家を建てました。グリフィスのために。グリフィスのためにラボラトリ、実験場をつくってくれました。こんなすばらしいことはありません。この2つはあとで写真でお見せします。その時にお話しいたします。

ただし、江戸から見ると福井は奥地なので、英語を話す人もなく1人取り残された気持ちである上に、一日千秋の思いで待つ家族からの音信が届かない、いまわしい不安が続く毎日であった。

第一、日本、いや福井へ来るということの心配は、先もいった誘惑どころじゃありません。死ぬかもしれないというおそれがあったのです。グリフィスは日下部の死を見ております。それで彼は学校新聞に、ラトガースの学校新聞は彼がつくったのです、学生のときに。その学校新聞にこう書きました。「僕と日下部が墓を、つまり僕が日下部のふるさとの日本の福井で死に、日下部は僕のふるさとのニューブランズウィックで死ぬということがあっても、そういうことが万が一あっても、みんな僕のことを忘れないでくれよ」と、こういうふうなことを書いております。

だからグリフィスはひょっとしたらひょっとということを、生命の危険ということを考えていたに違いありません。必ず護衛が付いておりました。護衛についてはもっと面白い護衛の話があります。

グリフィスは危険な目に遭わなくて、しかも1回だけキニーネというのを福井の医者からもらって飲もうとしたところが、毒が入っていたということがわかったということで、助かったという。どうして助かったかという、彼は少年時代に家の会計を助けるために宝石商人のところにアルバイトに行っていたんですよ。何か薬があるらしいですね、宝石を色々加工する。それでもって毒のことを知っておって、彼はとっさに「このキニーネはキニーネじゃない」ということがわかったので命拾いをしたということも書いております。

私はですね、グリフィスが福井にいる時に加賀の、隣の金沢ですね、金沢藩に雇われていった医者と英語教師などがいるのを知っています。グリフィスは見送っております。「いやあ、いらっしゃい。もうしばらくで加賀ですよ。頑張ってください」と言って送っております。舟橋も渡っております。

ところがそのうちの英国人の英語教師が大聖寺で天然痘のために高熱で急死します。これ、リトルウッドという名前しかわかっておりません。これは私、日記で見つけました。それで、ずっと、ずっと昔です、大聖寺へ行って、あそこに山下久男という民俗学の専門家がおるので聞いてみました。「この辺で外国人の墓は無いかな」と。「いやあ、あれじゃないかなあ」といって、2人が「これだ」といったのがリトルウッドの墓です。今でも加賀市久法寺の墓地にその墓があって、ずっとお参りしておりますけれども、今まで20数年間、毎年12月にお参りしております。

それはなぜかといいますと、もしグリフィスだったとしてもあり得ることなんです。それをグリフィスは身近に感じております。だから実に危険な福井生活であるということがいえるんですね。そういうところにやって来ているんです。でも結論は先にいいました。福井を通して日本を知ったと。これは私の結論であり

ます。

もう1つ加えておきます。グリフィスが福井へ来て得たこと、1つは仏教国であるということです。彼は“The Mikado's Empire”の中に非常に大事なことを書いています。日本を知るということは仏教を知らなければならないということ。だから『日本の宗教』という本を書いているわけです。こういうようなことを書いています。散歩していると家の隙間から家族が仏壇にお参りする姿を見えています。これは全部報告しております。実によくお寺に行っています。お坊さんのお話を聞いています。これは日記などを読んでいただければわかると思います。いっぱい出てきます。

そこで1つおもしろいことをいいたいのは今立吐酔という15、6の少年のことです。これは鯖江松成の満願寺の子どもであります。しかし、とりわけ秀才できこえた頭のいい子どもだったらしいです。その人がグリフィスの明新館の生徒になります。グリフィスはすぐに目をつけます。新しく建ったグリフィスの家にその子を入れようとします。他に5人入りました。一緒に自分の家に下宿させるのです。費用は自分がもちます。そのくらいのことを彼はいつもやっています。お金はそこへ使うのですね。

そしてその吐酔を自分の家に入れたときに何をしたかという、日曜にだけ賛美歌と聖書、「マタイ伝」の最初を勉強させるのです。これは別にクリスチャンにするとかいう意味ではなく、しかし、彼の心にはあったと思うのです。やってみようという。そのときに吐酔をいきなり入れるわけにはいけません。お寺の子どもです。だから、母と兄に一生懸命わけをいって懇願するのです。とうとう許しが出て吐酔はグリフィスの家に住み込みます。その吐酔ですが、さっき申しましたようにグリフィスの絶筆になった睦仁天皇の『明治史』を彼はああいう理由でもって私に訳さ

せてほしいといった。

そこから1つ考えられることは友情という問題ではないかと思うのです。我々と外国人との間に、友情というのはそういう例があるのですね。私もアメリカ人との友情があります。しょっちゅう手紙をくれる友達がいます。このようになるにはグリフィスの研究がもちろん大事だったことと、長続きするねばり強い手紙の交換、気持ちの交換、これがないとなかなか長続きすることはありません。みなさんの中で20年も30年も長続きする外国人の友達がありますか。やっぱり必要じゃないかと思うのですよ。そういうことをつくることです。余計なことですが、いっておきます。

それからクリスマスというのがあるのですが、これがね、グリフィスはこんなことを書いております。福井にいたときにクリスマスをやったのです。中心はストッキングに物をいれてやるという習慣ですね。ストッキングなんてありませんので足袋をつるさせたんです。足袋に何を入れるかということですね。入れるものはあるんですよ。小さな硬貨、キャンディ、鉛筆、そういったものを入れてやったのです。そこで雇っている下男、子ども、生徒達、みんながつるす。

みなさんアメリカなんかではストッキングをどこにつるすかご存知ですか。私も知らなかったのですよ。それからというものはテレビばかり見て、クリスマスのテレビはないかと見てみるとわかったのです。暖炉の脇なのですね。あそこにつるすようにしておくのですよ。他はつるしません。そんなこともわからずに私達はいたようなもので、私も恥ずかしかったのです。

こういうことも書いてあります。同じ1つの町でイエスの名が藩の高札で冒瀆ほうとくされ禁止されているのに、他方イエスをたたえる祭りが行われているという実に奇妙なことであると自分で自分の

ことを書いているのですよ。これおもしろいでしょ。

私はどう考えるかというと、常に時代は唸りを立てて変わっているんですよ。変わっているという時代、この時代はグリフィス自身が epochal years といっているんです。epoch、エポックメイキングのエポックですね。この epochal years というのはグリフィスがいみじくもいっていることに驚きました。

実は、これはハーバード大学の入江昭さんがいっていることばなのです。このハーバード大の歴史学者が、世界史的に見ても日本の1870年代前後は epochal years であると呼ぶにふさわしいということは常識化していますよと。明治元年の1868年は大したことないんですよ。まだ江戸なんですよ。したがって日本の福井にいるグリフィスは東京のことを「東京」とはいわない。「江戸」といっていました。そういう時代なのです。幸せな時代ではないのでしょうかね。時代の大きな転換期。私は今の時代がどういう時代かよくわかりませんが少し似たところがあるように思います。

4 写真に見るグリフィスの福井生活

お待ちかねの写真に入りたいと思います。

写真1は、グリフィスの家族の墓なんです。ニューヨーク州スケネクタディにあります。

この前の大きな墓、ここ一帯はグリフィス家の墓地なのです。大きな墓地でベール墓地と申しまして、その真ん中のお墓はグリフィスのお墓なのです。後ろに3つありますね。これがいいかったんです。グリフィスの姉さん2人と妹の3人、3姉妹の墓です。真ん中は手紙の主、マギーの墓です。小さいでしょ。なぜかというとな3人とも独身だったのです。

そして私はこのお墓を初めて探したんです。ラトガースの先生方はびっくりしました。よくこんなお墓を探してくれたと。自慢なのです、私の。ところが最近まで気付かなかったのです。なぜ小さな墓なのか。この3人は独身でもって亡くなるまでグリフィスの家族と一緒にいました。つまりグリフィスは彼女らを世話してやったのです。姉さん思い、妹思いのグリフィスということが



写真1 グリフィスの家族の墓

山下英一氏提供

わかります。グリフィスの家では3人の姉妹は亡くなっておりまして、そこへ自分の墓地へ埋めてやったのです。そういうお話です。

写真2は後列の左から2人目がグリフィスですね。左端の人はグリフィス書簡の宛名のマギーさん。このマギーさんはグリフィスが開成学校教授のときに日本に呼びまして、日本で最初の東京の女学校の教師をしました。とても頭のいい聡明なお姉さんだったらしい。マーガレットといいます。

それから上の列の一番高いですね、これが妹なんですね、メアリさん。グリフィスの右隣は2番目の奥さんです。福井に昭和2年一緒に来られた時、新聞などで着物を着た姿で写っている奥さんです。右端の人は2番目の姉さんのマーサです。つまり3Mですね。メアリ、マーサ、マーガレットみんなMではじまる名前の姉妹です。

この下の3人は最初の奥さんの子どもです。最初の奥さんとの結婚は最初の牧師をした教会で知った女性なんで、ちょっと東洋風のとてもきれいな女性です。

父は、ユニオン大学というところがここにありまして、ギリシア語の先生をしておりました。私これどうしてかといいますと、3人の姉妹とグリフィスという関係が何を物語るかということがわからないのです、まだ。何も物語らなくていいんですよ。です



写真2 グリフィスの家族と3姉妹 ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

が、特にグリフィスはどちらかというと女性に囲まれるタイプだったのです。小さい時から近所のお母さんたちにもかわいがられるタイプの男の子でした。

写真3は、お馴染みのグリフィスの家ですが、ちょっと誤解があるので話をしております。はじめ4つ家を建てるつもりだったんです。1つはグリフィスより先に来ていた語学教師のルセー*¹、それからグリフィス、それから後で来ることになっている大砲の士官ブリンクリー*²、もう1つはドイツ人の医者、その4人が来ることになっていたのです。

ところが、これもまた廃藩置県の影響でもってバタバタになってしまったんです。結局来なかったのは、ブリンクリーと医者です。ということでこの写真の何も無いところに等間隔でもう1軒建てるつもりだった。4軒建てるのだけれど、来ないということがわかっているのがあるから3軒になった。というわけで一番早めに何も無いところにルセーという人の家を建てるつもりだった。

ところがルセーというのは1年契約で契約が更新されないままに福井を追い出されました。だからこの家は必要なくなって土台だけ残りました。その次に建ったのは医者の家なのです。医者が来たらここへ入ってもらおうと、そしてグリフィスはこの家を選

び、一番向かって左側の家に入ったわけです。しかしそのうち医者も来なくなりました。ということでこの家は空っぽになって残ったわけです。「医者の家」と私はいます。



写真3 グリフィスの家(左) ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

* 1 Alfred Lucy 英国人、1870年6月から1年契約（生没年不詳）

* 2 Francis Brinkley 兵学教師（1841～1912）

グリフィスが東京へ行ってしまっただけで、この家は煙突の不備で焼けてしまった。そこで県庁の役人たちはこの誰も住んでいない家をこちらへ移しました。移動されました。ここへ入ったのがワイコフ*¹とマゼット*²というグリフィスの後に来た後任の先生たちです。2人入りました。これが続いたわけです。だからこの家はグリフィスの家ではありません。「医者の家」なのです、もともとは。そんなことはどうでもいいとはいいますがね。

そういうことでこの家が残って昭和11年でしょうかね、丸焼けになって今は姿もない。ただ下に基礎にあるような石は残っているようです、話を聞けば。そういういわれのある建物です。

大事なことをいいます。この2つの家をご覧ください。何が見えますか。煙突が見えます。煙突、左の家は見えないんです、何ですか。木があるからです。右の家は見えるでしょう。なぜですか。葉が落ちたからです。おそらく銀杏の木です。これは11月の写真です。銀杏の木の葉が落ちたから煙突が見えたのです。

* 1 M. N. Wyckoff ラトガース・カレッジ卒業 明治学院教授 (1850~1918)

* 2 Edward H. Mudgett (1852~1910)

写真4はグリフィスの書いた手紙の中に入っていた地図です。グリフィスの家は一番川下ですよ。足羽川が流れています。真ん中を見てください。ドクターズハウスって書いてあるでしょ。左手を見てください。ルセーズハウスと書いてあるのです。これらはルセーが設計しているのですよ。設計者が追い出されてしまった。

というわけで、ちょっと下を見てください。これを拡大したのがこれです。何を意味するかというと、これがグリフィスの家です。ここは川原。この道をみんな今まで行き来していたのです。でも家を建てたものですから、用心のためにここを仕切ってしまう

ってこの道を通れなくなりました。そこで裏側に道をつくったわけです。

それをたまたまグリフィスがこっちを眺めていると、日本人が通るんですね。知っている日本人はこちらの道に入ります。ところが中には何にも知らずに今までのようにやってきます。川から下りてこっちの道に入ろうとすると行き止まりにな

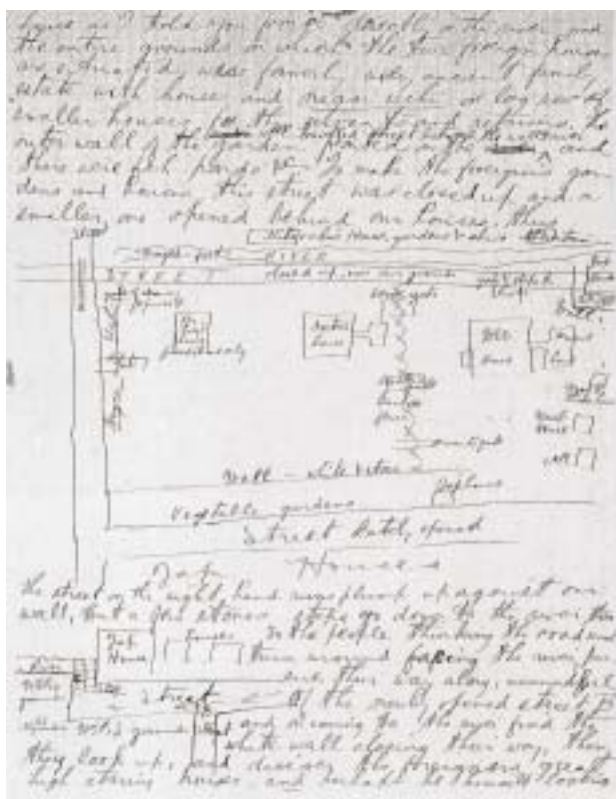


写真4 グリフィスの家の周辺図
ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

っている。あたふたと驚いている様子が2階からのグリフィスに見えるのです。グリフィスはいたずらっぽく日本人があわてふためく様子を上から見ている。そのうち「ああそうだ」と気付いてこっちへ入る。グリフィスもホッとする。こういうことをいいたかったのです、マギーに。

写真5は藩のつくったラボラトリなんです。実験室なんです。建物ですから実験場といいます。おそらくこれね、素晴らしい写真なのではないかと思うのです。

これについて、私は『若越郷土研究』で随分前ですが、この写真を見たときに、お城本丸にある番所と書いてあったのですよ。番所ですね。通行人を何とかするとか、太鼓を鳴らすとか何とかの。違うんじゃないか。これは番所なんかではなくグリフィスのためにつくってくれたラボラトリではないかなと思って、建築の専門家の明治村の菊池重郎博士に早速手紙を出して聞いたのです。すると多分そうであろうと、ただし問題が1つあると。煙突だ、と。これが鐘を鳴らす台かもしれない。

ずうっと後になって、グリフィス日記を見たら「8フィートの煙突」と出てきたのです。高い煙突でしょ。もうそれで決定的でした。これ理科実験場ですよ。ここを見たってどう見たって外国



写真5 実験場(ラボラトリ)
ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

風ですよ。それともう1つ、屋根の上に屋根があるでしょ、スカイライトです。光を入れる。ここまでわかったらグリフィスの手紙の中にこれの設計図があるのですよ、ぴたっと合います。この写真は

日本の化学の資料の中でも非常に貴重なものではないかと私は思うのでこの関係の人があったらそういうことをPRしてください。お願いします。実は、この写真はグリフィス・コレクション*1にありました。

この煙突と写真3の煙突についてグリフィスがこういう風に通信文に書いています。愛宕山(足羽山)から市内を見ると瓦屋根の平らの家並がずっと広がっていると。そこに2つ煙突がある。2つの煙突、それがこれだったのです。これは福井の町の人にとっ



写真6 村田氏寿
『村田氏寿手稿 関西巡回記』(三秀舎)より転載

ては初めてのことなので、おそらく不思議な気持ちで外国というものを見直すものになったのではないかと私はみています。彼は「2つの煙突」というふうなことばで表しております。私もそのことばは忘れません。

写真6は誰でしょう。村田氏寿*2です。

村田氏寿というのは、由利*3、岡倉*4という福井の人が自慢する人物に決して劣らない人物であるということを今日は申し上げたいのです。立派な写真でしょう。グリフィスの全ての世話をした人です。学校係です。学監といいます。この人につい

* 1 New Chemical Laboratory on left

* 2 学校係 (1821~79)

* 3 由利公正 福井藩士、五箇条の御誓文を起草 (1829~1909)

* 4 岡倉天心 近代日本美術の発展に貢献 (1863~1913)

てはもうこのくらいでと思ったのですが、どうしても今日話をしておきたいです。

写真7のグリフィスの写真は南校時代、教授のときの写真だと思います。

私が両方を出したのは2人の友情ということをもた話したいからです。この2人の友情は、グリフィスがさっき結婚したと申しあげましたね、結婚のお祝いの手紙まで出しているのですよ。グリフィスが結婚したということで結婚のお祝いを出しているのです。それからずっと後まで、村田からグリフィス、グ



写真7 グリフィス

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

リフィスから村田と友情を結んでいます。グリフィスも、国籍や血縁が人を結ぶのではなく、心が人と人とを結ぶのだといっています。

写真8は村田の手紙なのですが、12月8日と書いてあるのは陰暦です。1月17日です、陽暦は。グリフィスを研究しますと幸いなことに全部陽暦になっています。逆に言うと陰暦に書き直さないといけないので、これは明治5年の1月17日が陽暦です。

余談ですが「グリフィス」と私は簡単に言っており、みなさんもそうかと思いますが、グリフィスほど名前が無茶苦茶にある人はありません。クリューフリュースとかクリスとかグーリスとか無茶苦茶やってます。村田氏寿ですら無茶苦茶であります。なぜそうなったかわからない。GRIFFISという綴りが珍しいです。SでなくTHで終わるのが普通なのです。おそらくイギリスのウェールズが父の方の先祖だったと思うのだが、ウェールズ語にちょっと似たところがあります。とにかく難しい名前なのです。グリフィスこそ名前が何十もあります。姉さんのマギーも東京の女学校の先生に迎えたときの雇いの公文書の中だけでも4つあります。

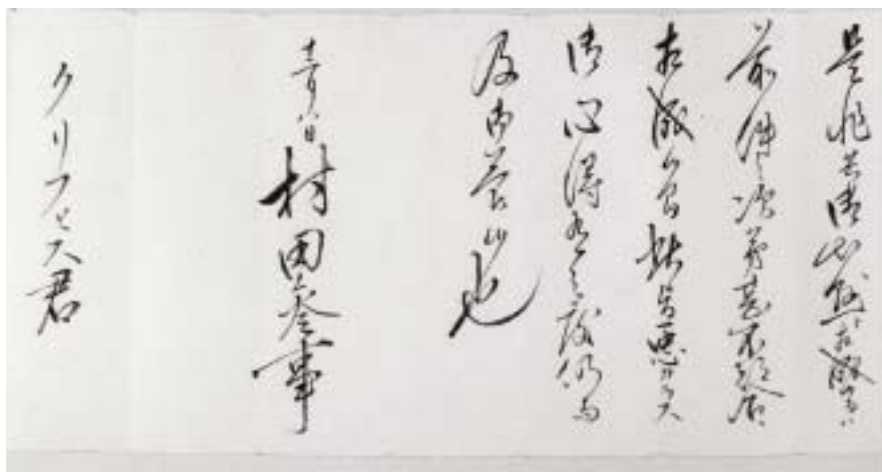


写真8 村田氏寿書簡

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

写真9の手紙ね。さっきの村田の手紙はグリフィスに福井を離れるなとっているのです。評判がよいから離したくない。グリフィスは福井を離れなければならない。東京のフルベッキ*1からお呼びがあつて従わなければならない。そうすると、村田は従わないでくれ、と。十分なことをしたのに出て行こうという。これ

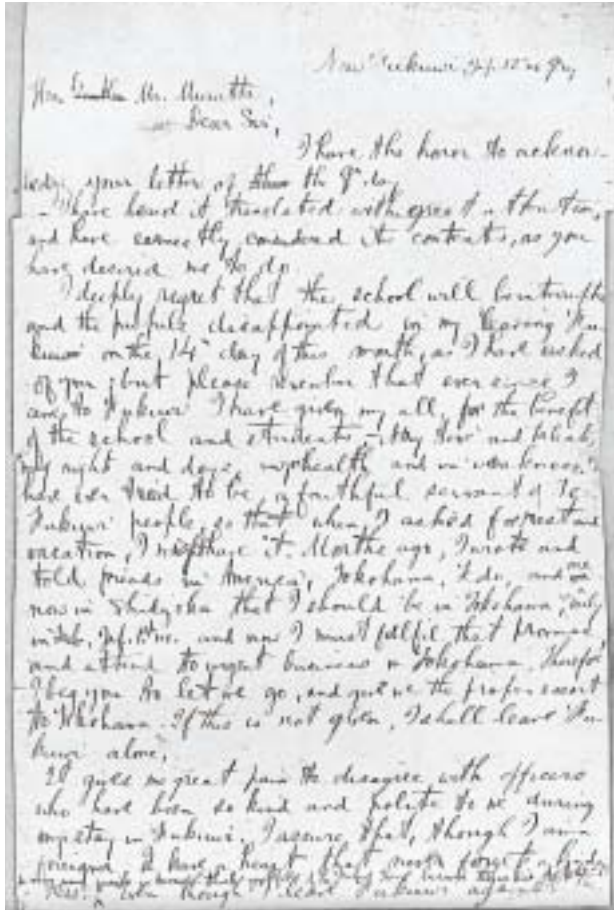


写真9 グリフィス書簡

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

だけ一生懸命やったのだから子どもが困る、ぜひ残ってくれとしつこくしつこくいうのです。その村田をグリフィスは好きなのです。村田は「白山」のような男だといっています。動かない。それから考え方が非常に素晴らしい。

それに対して、グリフィスが村田に早速、いややっぱりこういう事情があるって。これは訳すととってもいい文章なのですけれど今は時間が

*1 G. F. Verbeck 南校教頭 (1830~98)

ありません。ただ上のほうをちょっと見てください。これはこのとき初めて日本人に出す手紙だろうから、‘New Fukuwi’ と書いてあります。新生福井、新しく生まれ変わる福井。そういうイメージを持っています。その次に書いてあるのは旧暦の日本流の日にちが書いてあります。12月というのが書いてあります。そういう気持ちがあるということをおきます。

写真10は手紙の終わりですね。‘With high respect I remain’ と書いてありますね。尊敬を表しています。一番下、サインです。WEG (William Elliot Griffis)、みなさんにお渡ししたペーパーのWとEとGが1つに入っています。その次に書いてあるのがプロフェッサー・オブ・ケミストリーの略語です。化学教授という自分の立場を書いておきます。こういう長い手紙をああやっていろいろ消しながらすぐ氏寿に送っております。

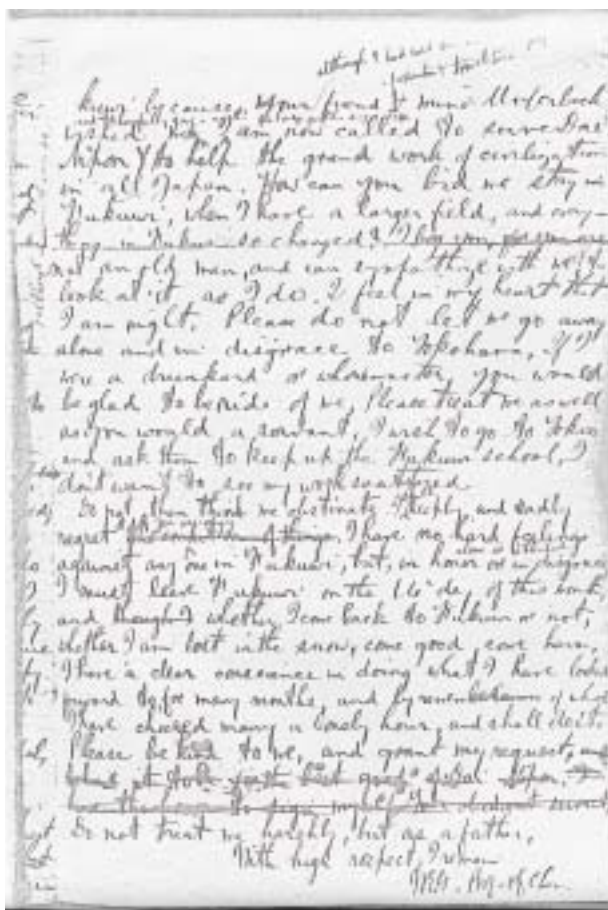


写真10 グリフィス書簡

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

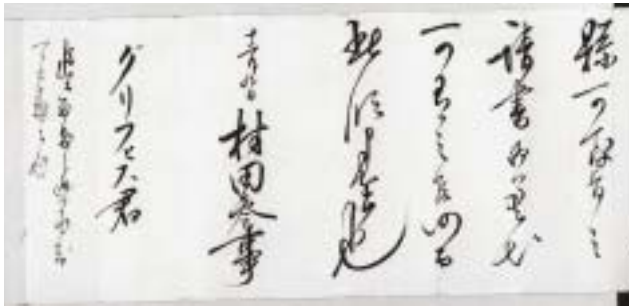


写真11 村田氏寿書簡

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

はい、次の写真11ですが、それに対して氏寿はまた仕方がない、君がいうことはわかった、承知したと手紙を出しています。

すぐ出しています。18日送った手紙、18日に返事しています。君は快く東京へ、江戸のほうへ行ってくださいと。一番最後のところ、今度はグリフィス君となっています。今いったことがこんなに出てくるのです。おかしいでしょ。

写真12は有名な写真ですが、実はですね、明新館のときの写真だとばかり思っていました。ところが実は、東京へ行ってから写した写真です。グリフィスが東京の大学へ行くということがわかったときに、明新館の生徒と一緒に先生のところへ行くという生徒が何人もいました。ところが藩はおさえました。グリフィスが向うへ行ってまだ落ち着かないのに行っても困るだろうと。その後追っかけていったのはこの連中です。南校の学生です。

どこへ入ったかという、元加賀藩の江戸表の屋敷がありますね。大きいんです。そこへ外国人教師は泊りました。そこへまたこの連中たちを入れたん



写真12 明新館出身の南校生とグリフィス(1872年6月21日撮影)
ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

ですよ。世話してやったんですよ。それを写した写真で、これ記録があるんですね。東京の内田写真、内田九一という今でも知られている有名な写真館ですが、その写真館内で写したのです。



写真13 グリフィス担任の南校1年生生徒(1872年6月21日撮影)
ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

写真13も同じ日に写したらしいです。記録があります。手紙があります。これは南校の彼が受け持った1年生の生徒のクラスなんです。全部で20名生徒がおります。ちゃんと数えてみたら20名おります。名前は私にはわかりません。1つ面白いことを教えます。

グリフィスの左隣に1人おりますね。背の低い人物。腰へ何か差してます。刀です。これガードなんです。まだこの時代でこれなんですよ。ガードがそばにいるんです。面白いといえば面白いけど。そしてその服装を見てください。洋風と和風の間です。時代が移ってます。どんどん移ってます。

写真14は、グリフィスが1874年に帰国するときに、上のクラスのハンサムな学生たちが見送っている送別



写真14 グリフィスを送別する開成学校生
ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

の写真なんです。立派なものでしょ、日本人学生。この中から留学していったのは沢山いるんですよ。みんな洋服を先生に劣らず着こなしている。この名前は分かるはずなのですが、私は調べておりません。

写真15は、グリフィスが日本で最初につくった本なのです。英語の教科書です。富士山が描かれています。この頃は慶応義塾の福澤諭吉が米国へ2回ほど行きました。

そのときに向うで英語のテキストをかつさうようにして、できるだけ取って帰って慶応義塾の生徒に使わせて、彼らが先生になって出かけた時にそのテキストで教えた。ところが、彼が取ってこなかった教科書があるんですよ。それは私が知っているんですが、『マガフィーリーダーズ』*1という教科書なのです。その頃アメリカで一番使われていた教科書なのです。なぜ取ってこなかったのか。キリスト教の精神が充満していたんです。

だから選ばなかった。だから『マガフィーリーダーズ』を使った学校は日本中にほんのわずかし



写真15 グリフィス著英語教科書

山下英一氏所蔵

* 1 “McGuffey’s Readers”

ありません。私はあることで探しました。2か所だけ知っております。だけどグリフィスはそういうことも知って自分が日本人の生徒のためにテキストをつくってやろうとってつくったのがこれです。

次、写真16が“FIRSTREADER”です。

巻3までつくるところを巻1までしかつくらなかった。なぜか、売れなかったのです。みんな慶応義塾に押されちゃった。



写真16 グリフィス著英語教科書 小浜市立図書館所蔵

その頃、慶応義塾だけでない、もう1つ沼津兵学校があったのです。沼津兵学校の卒業生と慶応義塾の卒業生が全国の英語教師になったのです。これは小浜市立図書館で見つけたものです。どこにもありません。これは『酒井家文庫』、小浜市立図書館です。

写真17は綴りの本ですね。ジャパン・シリーズ“SPELLINGBOOK”です。



写真17 グリフィス著英語教科書 山下英一氏所蔵

写真18はガイドブックです。横浜と東京のガイドブック2冊、彼は書きました。これは日本へ来る外国人のためのガイドブックです。非常に細かく書いてあります。泉岳寺も四十七士のこともいっぱい書いてあります。これを持ってみんな東京横浜を旅した。グリフィスは旅が大変好きでしたから、こういう本ができたのだと思います。

写真19は“The Mikado’s Empire”に大沢南谷の描いた挿絵の1つでちょっと面白いと思ったのは、昔話をおばあちゃんから聞いている孫たちですね。グリフィスの関心がわかると思いますからちょっと入れておきました。

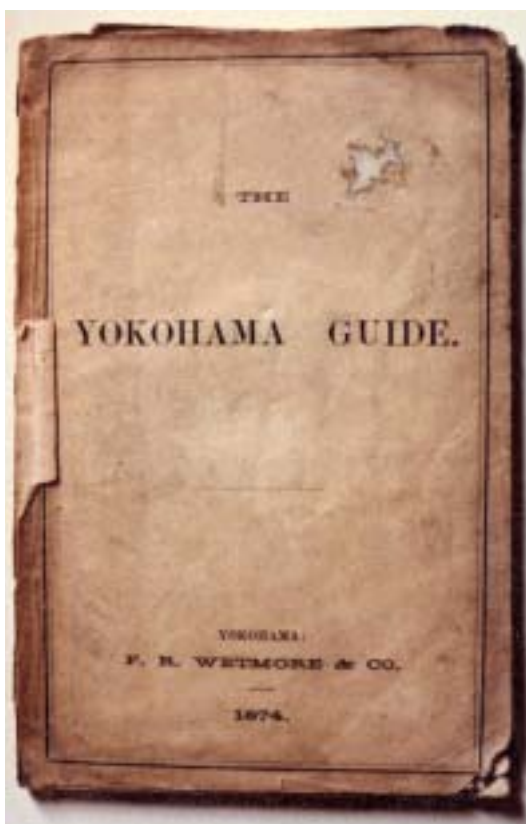


写真18 グリフィス著旅行案内書

山下英一氏所蔵



写真19 “The Mikado’s Empire” の挿絵（大沢南谷筆）

写真20ですが、Wペーパーにちょっと入っております。‘TO THE YATOI’、グリフィスはアメリカ人では日本に最初に来た雇いの教師です。あと200人ばかりいます、アメリカ人の雇いは。彼はそれを調べたのです。忙しい人がこのカードを出して、いつ頃日本へ来たか、どこで教えたか、いくらもらったかということを書いてくれって言って、集めたのが入っています。そういうこともやりました。これは日本人がやるべきことなのですよ。彼がやりました。

TO THE YATOI
(FOREIGNERS IN THE SERVICE OF THE JAPANESE GOVERNMENT)
1858-1900
OR THEIR CHILDREN, RELATIVES OR FRIENDS.

The undersigned; one of the Yatoi in Japan (1870-1874) would make a record of the services of those men and women from Western Countries, who, between the years 1858 and 1900, assisted the Japanese in Education in Civil, Mechanical, Mining or Electrical Engineering, in Finance, in Railway, Telegraph, Ship or Factory Construction, in the Naval or Military, Medical, Surgical, or Hygienic Sciences or Arts, or in any line of mental discipline, social improvement, commercial enterprise or phase of civilization. He respectfully seeks information as to their personality, accomplishments, previous record and preparation, services in Japan, and asks for an outline of their life and work. For the sake of accuracy and true history, let modesty give place to truth, and please answer if possible, as fully as may be desirable, the following questions. Send photograph also, if agreeable, and any available printed matter.

1. Date of Birth. 2. Education. 3. How appointed to Japan. 4. Date of Arrival and Departure from Japan. 5. Services to the Japanese. 6. Subsequent record and career, in outline. 7. Date of Decease, if not living. 8. Personal details as to wife and children. 9. Information as to other Yatoi.

The right cometh, and the living should be prompt to make record. Please Address :-

WILLIAM ELLIOT GRIFFIS, D.D., L.H.D.
 (AUTHOR OF "THE MIKADO'S EMPIRE", "THE RELIGIONS OF JAPAN", ETC.)
ITHACA, N. Y., U. S. A.

写真20 ヤトイに関する調査依頼カード

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

写真21は、日露戦争で日本兵が傷つきました。けがをして病院に入っています。病気になって病院に入っています。その人たちに心を慰めるために何でもいいから送ってあげてくれというカードなのです。横浜のH. ルーミス牧師へ送ってくれ、私に送ってくれたって困るけれども。そういう内容で、日本人傷病兵の慰問のためのカードであります。

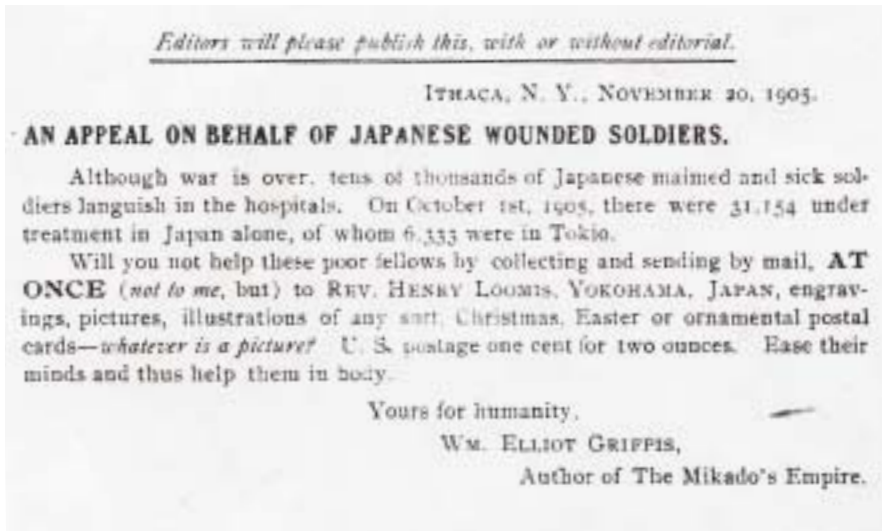


写真21 日本人傷病兵慰問のためのカード

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

写真22は‘POPULAR LECTURES’と書いてあるけれども、ちょうど私がここで話しているようにいろいろ大変なことですね。これはイサカというところだと思います。彼が住んでいるところで、イサカというのはコーネル大学という大学があります。日本で知られているのは農学部が非常に有名で、昔から農学を勉強する人はそこへ留学しています。コーネル大学のある町のことだろうと思います。1915年と16年にわたってこういう題目で話を

するから聞きにいらっしやいというカードです。

中に‘China, Japan, the Far East’というのがあって日本のこと、‘The Evolution of Japanese Nation’「日本国民の進化」という題で話をしますよとあります。以上3枚のカードを並べてみましたけど、全部對外活動であります。本を書くだけじゃありません。外へ出てもこういう働きをした人です。

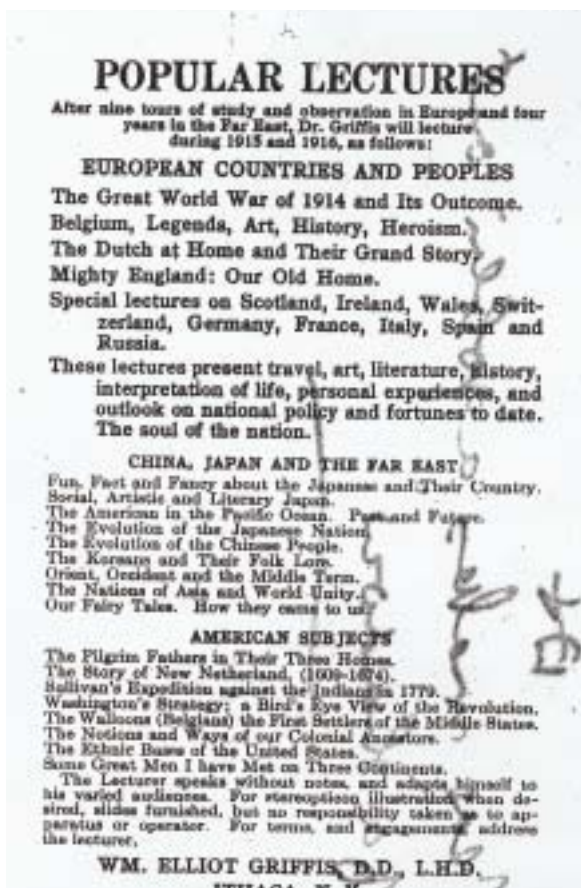


写真22 講演会案内のためのカード
ワトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

最後になります（写真23）。ちょっと皆さんびっくりすると思います。乃木希典^{のぎまれすけ}の手紙であります。乃木希典はご承知のように奥さんと2人で切腹しましたね。その12日前のグリフィス宛の手紙らしいです。何が書いてあるかといいますと日露戦争で福井中学卒業生の51名が死んでいる。とても働きが立派であった。非常に教養のある人たちばかりだった。聞けばあなたの教えた学校の後輩だ。福井中学のことをいっているんですね。

それでこの写真を、ちょうど私はちょっと他のことでおかしいんですけど、丸岡出身の作家中野重治さんが福井中学時代に、講堂の壁にこの写真が51の枠に入れて飾ってあったらしいです。それほどのことを我々は覚えておいていいのではないかと思うのですね。戦争がどうのこうのという建前ではなくて、グリフィスの昔教えてくれた学校の生徒たちの教養の立派さに驚きましたということを書いて感謝状にして送ったわけですね。ちょっと面白い手紙だと思って出しておきました。

以上で終わります。ありがとうございました。

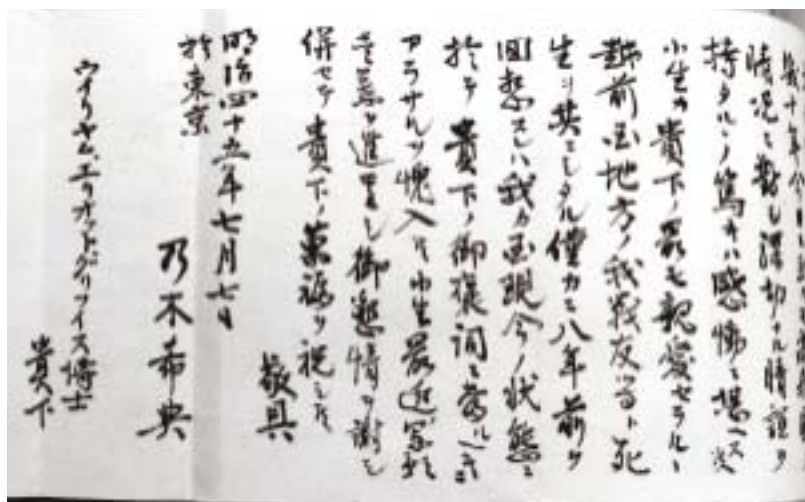


写真23 乃木希典書簡

ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵

5 むすび

最後に1つ、福井の人が親切だということをいっておきます。

グリフィスが感じたことはいうまでもありませんが、グリフィスの後に来たワイコフというお雇いの人が始終日本にいる間、福井の人は本当に親切な人だということをいっております。これはわれわれの誇りにしていいことじゃないかと思うんです。

それから、もう1つですね、随分後になってから、福井の4つの中学校、福中、武中、大中、浜中とおわかりですか、その中学が4つしかなかった時に、巡回して教えたC. R. コールバーンというアメリカ人教師がいて、この人があとで、岡山の第六高等学校の先生になっていった時に、グリフィスに送った手紙の中に、福井の人は私が福井に来たときも親切だったし、去るときもまた非常に親切であったと書いております。このことは、私は忘れてはいけないことだと思います。親切心は持っておれるものですから。食べ物や売り物と違います。これは大事にしたいと思います。

それから、さらにもう1つお願いします。ノーブレス・オブリージということばを最近よく聞くとおもいます。これは、自分がやってもらったことだけは、責任を持って返すということですね。こんな新しいことばのように見えるものでも、グリフィスの手紙の中にきちんと入っておりました。これは、グリフィスが藩がやってくれたようなことを自分もお返しをしなければならぬというような気持ちで福井生活をしている。福井で教えているということの意味しております。非常に大事な、いいことばだと思います。

最後になりますが、私は福井の子らに聞かせるグリフィス先生ということで、真実の子ども向けの本を1冊書きたいと思っております。これ夢です。どうもありがとうございました。

没 後 8 0 年

1843 (天保 14)	フィラデルフィアに生れる (9/17) 父方の祖先はウェールズのセーラー (水夫)		
	母方の祖先はスイス 農業		
63	ペンシルバニア市民軍 (第 44 連隊)	} 修業	
65	ラトガースカレッジ		
69	NB 神学校		神学校バーク博士 松平慶永 (春嶽)
1870 (明治 3)	福井 (日本) 最初の決心		
71	福井 明新館	} 教師	遺欧米特命全権大使 村田巳三郎 (氏寿)
72	東京 南校		岩倉使節団横浜出航 (ー73) 三崎嘯輔
73	開成学校		橋本綱維
74			南条文雄
75	ユニオン神学校 (N.Y.)	○ <u>The Mikado's Empire</u> 出版	今立吐酔
76		(皇國)	太田源三郎 (静岡藩士)
77	オランダ改革派教会 (N.Y. スケネクタディ)	} 牧 師	瓜生 寅
79	キャサリン・ライラ・スタントンと結婚 (ー98)		雨森信成
84	神学博士 (D.D.) ユニオン大学		出浦力雄
86	組合教会 (ボストン)		山岡次郎
93	組合教会 (N.Y. イサカ)		斎藤修一郎
99			
01	◎ヤトイに関する調査 人文学博士 (L.H.D) ラトガス大学		Bushido (新渡戸稲造)
1903 (明治 36)	還暦 牧師を辞す 最後の決心 (イサカ N.Y.)	} 日露戦争 (ー5)	
04			
05	◎日本傷病兵のための慰安		石塚左玄
08	日本政府より勲 4 等旭日章を受ける		西村真次
	著述家		朝河貫一
13		○ <u>The Mikado's Empire</u>	吉野作造
15 ~ 16	◎公開講座	12 版 (37 年間)	松村武雄
			芳賀矢一
24		日本人移民入国禁止令	
26	日本政府より勲 3 等旭日章を受ける		
27	グリフィス夫妻福井訪問		斎藤 静 (1891-1970)
1928 (昭和 3)	没年 ブラスキ N.Y. 2/S 避寒別荘地フロリダ州中部ウィンターパークで死去 日記 2/3 まで「グリフィス博士略伝」		
	Griffis Collection グリフィス・コレクション (ラトガス大学)		(福井中学校交友会発行)
	グリフィス文書の遺贈は 1929 年に始まる Fukuwi Notes や Letters		「グリフィス博士」
	は孫娘 Katherine G.M.Johnson によって 1964 年に贈られる		(「福井県文化誌」第 1 輯)
2008	没後 80 年		石橋重吉 杉原丈夫

Fukuwi

Journal から Letters まで『 』 自著
「 」 研究誌

- ①『グリフィスと福井』福井県郷土新書 5 1979 日本人学習者のための
(グリフィス日記) 英語テキスト
- ②『明治日本体験記』The Mikado's Empire 84 (平凡社 東洋文庫) 第2部訳 85 ⑪第2回「ザ・ヤトイ国際シンポジウム」
10/6~7 福井大会
③『グリフィス先生越前豆日記』 (緑の苗豆本第206集) 「グリフィスの読書が日本における
彼の仕事に及ぼした影響」
- 89 ⑦「横浜プロテスタント史研究会報」 The Lily Among Thorns
The House We Live In
A Maker of the New Orient, Samuel
Robbins Brown
- 1993 ⑩「中部大学国際関係学部紀要」 The Religions of Japan(1895)
Corea : The Hermit Nation
- 1995 ④『グリフィスと日本』近代文芸社 Honda the Samurai,
Japan:In History, Folklore and Art
The Recent Revolution in Japan(1875)
The Japanese Nation in Evolution
Matthew Galbraith Perry
Japanese Fairy World(1880)
The Mikado(1915)
The Tokio Guide
- 96 ⑫国際セミナー〈異文化交流と近代化〉
7/23~24 新島会館
「近代教育史の中のグリフィス」
- ⑥「英学史研究」 Millard Fillmore
Dutch Fairy Tales for Young Folks
- 2002 ⑬福井市・ニューブランズウィック市
2007 姉妹都市20周年記念展
記念シンポジウムで講演 10/26
「未来をみつめてー福井からの手紙」
- ⑤『グリフィス福井書簡』 (英文 和文)
グリフィス書簡注
- ⑨「若越郷土研究」
1999~2004
The Mikado's Empire(1913) The Fire-Fly's Lovers and Other Fairy Tales of Old Japan(1908)
Japan a World Power(1906)
- ⑧Swiss Fairy Tales
「北陸英学史研究」

グリフィス著書の分類とその数 (日本関係)

上記の数	歴史	6	伝記	3	聖書 (宗教)	3	民話	3	小説	1	テキスト	ガイドブ ック	1
計	29	6	7		5		3		1		5		2

グリフィスの生きた時代

d = diary
l = letter

1867	12 / 13 (d)	Eb. Johnson の妹 Ellen を知る	廃仏毀釈運動
68	(明治 1)		
70	10 / 10 (1)	日本行きを長姉マーガレット(マギー)に知らせる	
1871	9 / 20 (d)	Boy's Book on Japan, took definite shape	廃藩置県の詔書出る
(明治 4)	7 / 15 (1)	"Tales of Old Japan"の注文をマギーに頼む	epochal years (G)
1872	1 / 17 (d)	翌年 2 / 19 フルベッキの家で読み注文取消す	
	8 / 9	母 アンナ マリアの死 グリフィスに牧師を期待	
	10 / 1 (1)	マギー来日	
		ケブロン (Horace Capron 1804~1885) と随員一行が北海道開発調査のために招かれて来日。1873 年 11 月 22 日岩倉具視の自宅におけるケブロン夫妻を招く食事の席に文部省学監マレー夫妻らとともにグリフィス姉弟も招かれた	
1876	71 3 / 27 (1)	アメリカ独立記念年 フィラデルフィア万博開催	1873 征韓論の政変
(明治 9)		スクールキル川の下流 市街西部の両岸フェアマウント公園がその会場であった	
		<u>The Mikado's Empire</u> 出版	自由民権運動
81	3 / 16 (1)	ヘボンの伝記を書こうとしてもらったヘボンの自伝的書簡で『皇國』を興味深く読んだと書かれていた グリフィス著 "Hepburn of Japan and His Wife and Helpmates" の出版は 1913 年であった	
91		ロンドン国際宗教会議に代表としてヨーロッパへ派遣される	1889 帝国憲法公布
93		シカゴ万博 (The World's Columbia Exhibition) と共催の International Folklore Congress でグリフィスは 'The Folklore of Japan' を講演した (1893)	
97		オランダのヴィルヘルミア女王の戴冠式に出席	1894 日清戦争
1903		<u>The Mikado's Empire</u> 第 10 版 2 分冊になる。版を重ねるとき新しい論文を加えていった(ー1913)。	日本精神(spirit of old Japan)
(明治 36)		<u>Bushido(The Soul of Japan)</u> 1899 にグリフィスの Introduction を載せる	C.R.Colburn 英語の巡回講師 (福井 武生 大野 小浜の中学)
05		イギリスのパロウ(人口 3 万)に日本人 4000 人がホームステイして金剛造船の仕事をした。トラブルなし	福井中学卒 51 名が日露戦にて戦死した。
12			明治天皇睦仁逝去(1852~1912) 乃木大将夫妻殉死
26 ~ 27		日本国内の講演旅行 プリンス徳川による日米協会主催の夕食会	1925 日本人移民入国禁止令 (黄禍論)
		朝鮮 京城で齋藤総督による晩餐会に出席	
		維新史料編纂会主催の講演「明治維新当時の懐旧談」	
		4 / 25 ~ 4 / 29 福井滞在	
		「青い目の人形」の贈呈 'The Invasion of Japan by the American Dolls' (グリフィス)	
		6 / 1 ~ 2 箱根富士屋ホテル泊	
1928		絶筆 "Japan's Great Emperor, Mutsuhito and His Reign 1868~1912"	Feb 2, Thursday
(昭和 3)		'Dr. Griffis, Friend of Japan Dies' (The New York Times 1928.2.6)	At Rollins College
		"The Way of Ume" Edith A. Sawyer のグリフィス序文は死の数週間前に書かれていた	10 A.M. talk in chapel to the students on Japan

<講師紹介>

山 下 英 一 やました えいいち

- ・ 略歴

- 1934 越前市（旧武生市）生まれ
- 1952 県立武生高等学校卒業
- 1958 明治学院大学文学部英文学科卒業
- 1958 県立勝山高等学校教諭
以後、30年間県内の高等学校教諭として勤務
- 1988 中部大学国際関係学部助教授（外国語）
- 1997 中部大学国際関係学部教授（外国語）
- 2000 退職

- ・ 所属学会 日本英学史学会

- ・ 研究テーマ W.E. グリフィスについての研究

- ・ 主な著書

- 『グリフィスと福井』福井県郷土新書 5 福井県郷土誌懇談会 1979 年
- 『明治日本体験記』 東洋文庫 430 平凡社 1954 年
- 『グリフィス先生越前豆日記』緑の笛豆本 206 集 1985 年
- 『グリフィスと日本 明治の精神を問いつづけた米国人ジャパノロジスト』
近代文芸社 1995 年

- ・ 主な論文

- 「グリフィスのもう一つの福井」（『福井の文化』第 6 号 1985 年）
- 「瓜生寅の英学」（『若越郷土研究 第 39 巻』 1994 年）
- 「春嶽の英語稽古」（『若越郷土研究 第 40 巻』 1995 年）
- 「グリフィスの福井からの手紙」（『若越郷土研究 第 48 巻』 2003 年）
- 「グリフィスの福井民話」（『若越郷土研究 第 51 巻』 2006 年）

本稿は平成20年 2 月16日に、福井
県立図書館多目的ホールで約120名の
来聴者を前に行われた文書館県史講
座「グリフィスの福井生活」の内容
を講演録としてまとめたものです。

福井県文書館県史講座記録
グリフィスの福井生活

平成20年 6 月20日 発行

編集発行 福 井 県 文 書 館

〒918-8113

福井県福井市下馬町51-11

Tel.0776(33)8890

印 刷 株式会社エクシート

〒919-0482

福井県坂井市春江町中庄61-32

Tel.0776(51)5678
